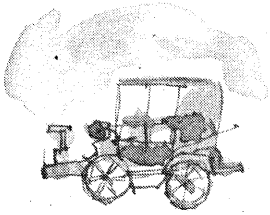
◇講演◇

幼児教育の原点

森田宗一



一　はじめに

・わが歴史（生活史のこと）

最初に、恥ずかしいことながら、私自身にまつわるいくつかのことをお話させていただき、一つのあかしとさせていただきたいと思います。

私は、本にも書いているとおり、生まれそこないでした。幼な友だちにも「宗ちゃんは、やせっぽちで人の前ではものを全然いわない子どもだった」とよくいわれました。

私は、自分の生活歴といいますか、誕生前からのわが歴史、わが家の歴史というものを分析してみたことがあります。私が母の胎内にやどりましたころ、わが家は最低の時期でした。「気はやさしくて力なし」の典型のおやじが家運を傾けました。母親は無学でしたが、いわゆる「お袋」というにふさわしい、でんとした安定感をもった人でした。このごろのお母さんや先生のように朝から晩までイライラ、ガミガミしたり、あるいは機関銃ママとあだなされるような言葉を発射しないのです。黙々働いている、家を支えている、鎮座しているというだけで。それだけで、まるでふるさとの山のように安定していました。

そういう母親の姿勢のおかげで、子どもたちは直接母親のかげというか、母親の翼のもとで安定感をもってすごせたという気がいたしました。

私は、また早産児だったらしく、幼少のころ、大変虚弱であった上に、ろくすっぽ栄養のあるものは食べられない状態でした。ただ、山村で生まれ育ったことにまず感謝していました。ただ子どものころから、いわば内向型の問題児だったと思います。やせっぽちでかぜをひきやすく、人世をむなしく感じたり、生まれてこなければよかったとか思うことがよくありました。

今でも本性はかわらないのですが、とりわけそのころは内向的神経質な問題児だったと思います。

十代のころは、家庭を離れ、東京にでて昼働きながら夜学ぶという生活をしました。父は私が中学を終える前に死にました。そのころむなしい日々でしたが、高等学校に入ったころ急に世界が開かれたという気がいたしました。十九歳のおわりごろです。そのころ、兄も五人の子どもを残して死んでしまいました。そうなると、母は兄嫁と孫五人を背負って一家をささえるということになりました。学生時代私が、その子どもの面倒をみるためにちょくちょくもどって行ったとき近所のおばさんが「宗ちゃんは、まだ生きてたのかい」といったほど、私は生まれそこないでやせっぽちで虚弱だったのです。

その私が、今ここにこうしていられるのは、かえりみますと、多摩川の上流の山と川と自然という母なる大地の中ですごせたということ、そして何よりも母親が、お袋であってくれたことだったと思います。

幼児のころから「さずかりものは、丈夫に育たないはずはない」ということを母親は、よく申しました。弱い子だということは意識させないようにしましたね。寒い時には山まで走らされたり、うす着で外に出させられたりしました。そのことが今も十万年も前からもかわらない親の育児のいとなみのコツだろうと思います。医学的にみても児童学の面からみましても、可能性を開発するという正しい姿だと思うのです。

今日の時代は、いかに「もやしっ子」製造業を親や保育者はしていることか。それが少年以後の青年期になってもさまざまな問題のもとになっており、後遺症をみるのです。私みたいな生まれそこないでない、まるまると太って強く生まれた子を、三、四年の間にだれがもやしにしてしまうのでしょうか。政治や行政やいろいろなことのしわよせを子どもが背負わされ、親のところに防波堤がなかったり、家庭そのもののおかれている社会に問題があったり、あるいは医療制度のひずみが、持って生まれた可能性をゆがめるということが、残念ながら常識になりつつあるのです。

今や人類の先は暗いと科学者などにいわれていますが、私は逆にそういう暗い時代だからこそ、勇気と望みの光を求めるべきではないか、むなしさの中に本当の人間のあかしがあるので

はないかと考えるのです。

私は、少々必要以上に自分の虚弱でできそこないであったことを話しましたが、自然という母と、お袋の生き方、倉橋先生流にいうなら「育ての心」をもった母親のおかげで、ここにこうしていられるのだと感謝しているわけです。

今の臨床の場で、「気はやさしくて力なし」青少年とか、なるべくしてなったような心身虚弱児をだれがつくっているのかと問いかえされなければならないケースにたくさんぶつかるので、恥をしのんで私のことを具体的に話し、皆さんにこのことをとくと考えていただきたいと思ったわけです。

・親子の出会いと別れと再会

もう一つお話ししたいのは、私はさきごろ二十六歳の誕生日を迎えました。私は、大正四年生まれですから、三十年差し引いているわけです。

うちにはよその子とうちの子の区別のわからないぐらいたくさんの若者（光の子学園の子どもとリーダーたち）が出入りしておりますが、私ども夫婦には五人の子どもがおります。上二人が息子で、下三人が娘です。皆、人生の鈍行が好きらしく、ストレートで進むのが少ないですね。そういえば私自身も鈍行でした。小学校を終えて上京し夜間中学校へ行きました。働きながら学び、一年浪人し、安あがりする学校だときいて一高へ入りました。高等学校から大学へいく時、何をやっていいかわかりませんから一年浪人しました。子どもの問題をやろうと思いましたが、どうやればよいかわからずボヤボヤしているうちに一年。そして、大学を出て一年、また司法省保護局でブラブラしました。そのころリューマチにかかり三、四ヵ月寝こみ、その間に司法試験をうけました。昭和七年、戦争突入のころでした。

今から思うと、そのころ大きな影響をうけた方に倉橋惣三先生がおりました。私は、直接に教育学とか児童学とかでの弟子というにはふさわしくないのです。しかし、暖かい人柄にひかれてよくお目にかかりました。詩人でもあり信仰の人でしたが、科学者だったとも思います。人間というものの可能性をみつめる目は、実に客観的で明るく暖かい人だった。先生は子どもの世界をよく理解し、幼児教育の科学化への先達だったと思います。先生の感化もあって、私は、児童の問題、少年の問題、非行少年の問題へとすすんだように思います。

話はもとにもどります。

長男、次男は、まだ独身ですが、長女は結婚しました。そのうえ一番末の十九歳になる娘が、彼女の過去を総括して、ある人生に賭けたいと、大学へいくのをやめて修道院へ行きたいと、

言っていましたが、兄の失明の事故が機縁で、兄の友人と出会い、結婚することになり、彼とともにそれぞれ家庭と親を離れて、アメリカへ旅立っていくことになりました。

親と子との出会いと別れ、そこに家庭教育があると思いますが、別れの時に当たって改めて育児・保育とは何か、ということを深く考えさせられるように思います。

幼少時から目先のことだけを無難にすごすのでなく、遠い視野をもって先の長い人生、十年、二十年先においておこるであろう、思いがけない出来ごとに対処できるよう、どんな風雪にもたえていける人柄をつくっておかなければならないと思うのです。人間はたしかに、死ぬまでは生きている。その長い旅路の先の日のためにこそ、今、何をしなければいけないのかということが大切なのです。ところが目先のことだけにのみとらわれているのが、今日の保育のように思われる。技術化されすぎた非科学性だと思うのです。

ちょうど今から三十年前、私は結婚するのと仕事につくのと同時に家庭の出発をしました。ようやくここまで来た感じです。そこで、今あの初心にもう一度かえって、出発し直したいと思ったわけです。娘も十九年を総括し新生活に入るなら、私も五十六年を総括してみようと考え、その一里塚の一つとして、昨年「人間の復興」(雷鳥社)という書物を書きました。これを旅の道標として、二十六歳宣言をしたわけなのです。私の五十六歳の誕生日を五人の子どもと二人の娘の夫たちの七人で祝ってくれました。その七人の平均年齢が二十六歳です。

その時、七人が思い思いのひとこまを書いてくれました。その中で長女の書いてくれたことに親子関係の原点をみる思いがしました。

それは、

「お父さまは二十六歳を宣言し、新しい誕生の日を迎えて、新しい人生をもう一度勇躍して進もうとなさっているんですね。新しい日なんですね。私も出かけます。太陽にとけた海をみつけ、これからも若がえったお父さまとの出会いをいつも大切にしていきたいと思います。」

短い文章ですが、「私も出かけます」というところに心うたれました。(少々親馬鹿というところでしょうか。)娘が嫁にいったりすると、父親はおもてでは何事もないようにふるまいながら、心中では寂しいというのが定説のようですが、私も親馬鹿の一人として少々その味を味わいながら、もう一つの新しい思いを強くしたのです。われわれも新しく再出発しよう。娘たちの新しい人生の旅にあやかって負けずに前へ進もうという気持ちです。「おれは二十六歳。彼女たちが選んだ彼氏は二十七歳と二十八歳。そうしますと、私よりも安心な、良い夫としての要素を

もっている。あるいはこっちよりも品質がよさそうだ。こちらは、あちらをおいかけるのだ」という気持ちが強いのだろうと思います。

私の家庭のことを語り過ぎましたが、親と子に関するある詩をここで紹介しておきましょう。「家庭における児童」というテーマで、十数年前東京で開かれた世界国際児童会議のある分科会で、香港大学のアメリカ人教授のミス・ライトという方が講演中〃日本を含めて、アジアの家庭と子ども〃というようなテーマで話されて最後に引用された、レバノンの詩人カーリル・ギブランの詩です。

「あなたの子は、あなたの子どもであって、あなたの子どもでない」という題です。「彼らは、明日の家に生きている」という題としてもよいと思います。

彼ら（青春期になった子たち）は、人生の希望そのものの息子であり娘である。
彼らはあなたを通じて来るがあなたから来るのではない。
彼らはあなたとともにいてあなたに属してはいない。
彼らの魂は、あなたが夢の中でさえ訪れることのできない明日の家に住んでいる。
あなたは彼らのようになろうと努めてもよいが、彼らをあなたのようにさせてはいけない。
なぜなら、人生はあともどりもしなければ、昨日のところにとどまってもいないから。
あなたは弓であり、あなたの子どもは、それから生きている矢として送りだされる。

私は、この視野を日本の親が持つように努めたいと思うのです。ことに母や教師が、幼児を保育していく上に持っているべきだと思うのです。この詩を知って十数年来、いよいよその感を深くすることが多いのです。成長しゆく子どもの思いと願いを代弁しているように感じるのです。親を離れ旅立ち別れていく子どもの姿の中に、そうなった後の親子の再会の中にこそ、本当の親子関係があるといえるのではないかと思うのです。

二　このごろの子どもの問題

・親と子のつながり

このごろの家庭とか幼児教育における子どもの問題を実例を中心に考えてみましょう。

「もてあますように育ててもてあます」という川柳がありますが、いろいろ明暗のある事例にふれておりますと、子どもは、「親のかげ、もしくは鏡だなー」「この親にしてこの子あり」と

思うことにしばしばぶつかります。

周囲の影響をうけやすい子どもにとって、最初だれと出会い、それからだれとどこでどう出会っていくかが大切なことだと思います。その子の「わが歴史」になるのです。

人間は、ただ食べて大きくなるというのではない。人間は、愛を食べて生きている生き者と定義することもできましょう。人間というものは、人間と人間との出会いによって教育されるものなのです。人間らしく人間に出あって、その中で人間形成というものが意識的にあるいは、無意識的におのずからなされてくるものです。

そういうプロセスが幼児のころから必要であって、十代になりますと、自ら自分の道を選択して、責任をもっていくようになります。それ以前は、親や保育者の影響を非常にうける。そこに大事な教育の問題があるのです。

よく教育相談の場で、母親のうったえを聞くことがあります。「言うことを聞かず、わがままでがんこだ」とか、「偏食でがまんが足りない」とか、いろいろうったえるのです。面接の秘訣は、大変忍耐のいることですが、よく聞いてあげることです。すぐに結論を出したり、診断を下したりしないで、本人に言わせることです。その話を聞いていると、子どもの症状は、母親とそっくりなのです。「子どもは、あなたと同じですよ」と直接いうのは、簡単ですが、これでは母親をおこらせるだけです。母親自身が「そうだった」と思い、自己洞察ができ、自分自身にかえってくれたときに、その子の治療が始まるのです。

鑑別所に入れられている十八、九歳の少年の父親や母親の中にも、なぜそんなところに入れられているのかわかっていない人がしばしばあります。ところがある少年の場合などでは、わずか二週間の間に、両親が「本当に親って何だったのか」ということをしみじみ考え、総反省されました。それが十年前からわかっていれば、こうならなかったでしょうにと自覚しました。その少年も最初会ったときは、彼自身自分のことばっかりしゃべり、世界は自分中心にまわっているのではないかと思っておりました。鑑別所の先生方の客観的なテストや、その中で生活していること、親との面接なども影響したのでしょうが、それより何よりも、彼自身の洞察があったとしかいいようのない変わりようでした。

父親が、「息子は、短い日時のうちにこれほど成長するとは思わなかった」というほどです。少年にいわせると「お父さんには反感をもち、ただそのそばから逃げる。そうするとお母さんが、かばってくれる毎日だった」そうです。

ようやく親と対話できるようになったといいますか、親の身になって、その立場がわかる状態になったわけです。もう、こ

れは治療の始まりです。ここまでくると、その少年の非行性といいますか、問題は解消しつつあるのです。一般的に、そこまでもっていくのに、三ヵ月か四ヵ月かかります。少年を家庭から離し、その子の生活史、親の歴史、親と子のつながりの歴史を総反省し、原点に復帰して、新しい日をスタートさせるには、半年、一年とかかります。そして必ずしも成功するとは限らないのです。

十八、九歳になった非行少年とか問題児のような特殊な場合ですらこうです。幼児や児童ぐらいの時の教育相談、自閉症的問題だとか、わがまま、偏食、その他いろいろな問題解決の場合なども、こういう出発点が必要なのです。

●もてあますように育てられている子

近ごろ、産むのだけでも大変なのに、育てるのは社会に、などという無責任な母親もいますが、そういう母親をのぞいては、「自分のすべてを変えてでも子どものためには」と思っている熱心な母親が多いと思います。その育て方をみますと、「もてあますように育ててもてあます」なのです。まず出発点、ボタンのかけ始めから間違っているものが多い。それをそのままにしておいては、どんな治療をしても、どんな立派な施設に入れてもなおりにくいのであろうと思う。非行少年を育てている親の背景にある問題を歌にたくしますと、「それころぶ、それあやうしという老婆心のすぎたるまもり子らをそこなう」なのです。

無保護もいけませんが、過保護もいけませんね。これはむずかしいことですが、まことに子どもに一生懸命なりすぎのあまり、真向きになりすぎているのです。

雨がちょっとふると風邪をひくのではないか、ぜいぜいするとぜん息ではないか、それを医者だ、クスリだ、と心配したり、あわてたりする。そんなことは、医者と相談し、子どもの本当の姿を見る目をもって承知で知らんふりをしていれば、大方なおる場合が多いものです。

昔の母親など無学ではあっても、そういう子どもを見る目はもっていたのではないか。内心はどんなにハラハラ、イライラ、オロオロしたかわからないだろうと思いますが、「さずかりものは育たないはずはない」「大丈夫だ！」と宣言したのではないか、と近ごろになって思うのです。心配してみたり、ちょっと悪いと誇大に考えてみたりするのは、いつに変わらない母親心だと思うのです。そこに母親のありがたさがあるのですが。故人の言葉でいえば「子を生むことはだれでもするが、親たることは至難なことだ」ということ。倉橋先生流にいえば、何より親の「育ての心」が大切だと思います。真向きよりむしろ横顔とうしろ姿です。

とかく、母親は、「それころぶ、それあやうし……」といいたいものです。特にちょっと弱い子はかばい過ぎになり、かえって弱さに深入りさせやすいものです。子どもの本当のニードは何であるのか、その子には、どんな可能性があるのかをよく見きわめて、線を太く息をながくして間をおいて、つまり大きな間合いをとって保育したいものです。

・欲求が満たされやすい世のケース

今日、物に余って人間の精神足らぬ、異常な消費社会において、「おしみなく物を与えて子どもらに、自主性与えぬ親の無慈悲さ」という親が多いのではないか。高度経済成長の中での家庭教育の無慈悲さを感じることがよくあります。与えすぎているのです。それは愛の親切とはちがいます。おあずけができにくいのですね。親だけでなく教師の無慈悲もありますね。あんちょこを与えないで考えさせることが少ないのです。おあずけの中におかれると人間の脳の前頭葉の発達がうながされるわけです。人間は、抑止されたり、想像し工夫したり、いろいろな抵抗を感じながら、三歳から六歳ぐらいまでに脳の発達が大きく成長するといわれます。

それが、おしみなく物を与えられ、まわりから物でもって欲望がすべて満たされてしまうと、前頭葉の皮質が発達しない。それが習性になってしまい、ブレーキのきかない子になってしまうのです。まさに、「気はやさしく力なし」意志力抑止力、忍耐力、物をやりとおす力、がまんする力などが育っていかないのです。本当にこのごろの非行少年などの背景をみると、「おしみなく物を与えて」おあずけの味がないのです。だから依存的で、つい人にさそわれると悪いことでもいやだといえなくなる。欲望と物との間に距離を置き、間をおくということがない。人間を育てるということの素朴な大事なことが欠落してしまっているのです。

・ある実例

次にお話しするケースは、今の非行少年のおこす問題行動の多くに共通する問題を含んでいると思います。

A、B、C、の高校生三人が、ちょっと知っているかわい子ちゃんを送ってあげようと車に乗せ、あてのないドライブにさそう。目的のないドライブ、しかも夕方、やがて夜になる。相模湖畔、月は直天に、星は天涯に、ボートは湖面にうかんでいる。何かおこりそうな絶好の舞台装置ですね。水、車、月、星、……。こういう時はあぶないということは、女性の身ごなしにも問題がありましょうが、男性自ら自分をコントロールするという抑止力がないと大変です。おあずけができないということ

が常に問題になります。ある日大変な事件がおきました。

その時までにA、B、C三人は、自動車窃盗を何件もやっている。盗んだ車で湖畔へ行った時の事件は強姦ということです。欲望の抑制力がなく、人の身になって考える力も十分でないのですね。欲望を刺激するようなものが満載された社会で、とりわけ意識的におあずけするとか、人の身になって考えるとか、その場にどう対処していくかなど、学ぶ練習をしておかなかった結果、むなしい人間性の喪失をきたし、まさかと思う事件をひきおこしたわけです。

この少年たちは、鑑別所での専門的な診断の結果によりますと、素質は悪くなく、知能も低くない。家庭では何不自由なく育ちました。生まれた時もまるまるとちゃんとしていたにもかかわらず、一年たち、三年たち、五年、十年、そして今や十五、六歳、親を乗りこえて、船出をしてもいい時期なのに、過保護といいますか、依存性が強いといいますか、悪い子ではないのですが、結果的にはとんでもないことをしでかしてしまうのです。こういう犯罪とは限らず、教育相談の場などにもよくあるケースですね。幼少時からの生活歴中に性格形成の盲点があるのです。

十代の半ばをすぎますと、男性は性に対する発散的な欲望、関心が強くなります。欲望それ自体が悪いというわけではない。どこでどう満たし抑止すべきかが身についているかどうかが問題です。ことに性のことは、相手の人間の大事な運命にかかわることだという情操が育てられていれば、それが歯止めになるわけです。それをどう処理して、どうふみ台として動物以下にならないか、万物の霊長たる道をすすめるかということです。ABC少年の非行の中心はA君でした。A君の親は典型的に教育熱心で、物に余る生活をしていました。父親は会社の重要な役付で母親は高等教育をうけ、地域の婦人会や何やらの役員などもした者です。

「うちの子にかぎってこんなことはない」というA君の母親に、こんなふうにたずねた。

「こんなはずはないといってもこんなはずになってしまった。何か思いあたるふしはないですか」

すると情なさそうに「いっしょうけんめいやってきたのですけど……」というだけです。しいて言えば、子ども中心に、ホイホイ物を与え、一生懸命にやりすぎたのです。もう少し横顔、うしろ姿でやればよかったのでしょう。そしてこんなこともおっしゃる。

「うちの子は気がいいものですから、さそわれるといやといえず、お友だちに、ついさそわれて」

更に母親の言った言葉は聞きずてにできないと感じました。

「何不自由なく与え、私自身を犠牲にしてまでも子どもにはしてあげておりましたのに、親のことも考えず、めいわくをかけて……」とくりかえす。「何不自由なく」気ままに与え、させていたという。ここに大問題があったわけです。しかも母親は今になってもそのことを悟らないのです。

「おしみなく物を与えて子どもらに」のあとに「おあずけの味与えぬ」「人の身になる心与えぬ」「のびのびと活力をもって、物事をやりぬくことを与えぬ」と言いかえてもよいでしょう。ここに今日の家庭や学校における重大な教育の課題があると思うのです。

・おあずけの味、待つ心

さて、「おあずけ」という意味の語源は、そうくわしく調べたわけではないのですが、欲望と物との間に距離を置く、時間を置く、ちょっと待ちましょうという「待つ心」だと思います。それが、兄弟大ぜいいますと、それぞれ虚々実々にそう簡単にストレートに右から左へというわけにはいかないから、自然に身につくわけです。一人っ子とか、二人子とか、物が余って、余裕のある家庭の子は、親や保護者が、意識的に歯止め、おあずけの味を与えないと、盲点ができます。

かえって物の乏しい時代、戦後の一時期、他の点でマイナスはあったかも知れませんが、皆と分け与えていかなければ生きていかれないという時代の方が、子どもを育てやすかったといわれるゆえんです。

私の家なども、戦中戦後、九年間の間に五人の子どもができ、おまけによその非行少年をあずからなければならなかったという状態でした。いもの子を洗うような、大ぜいわいわいしている間に、自然に子どもたちは、お互いにけん制しあい、ゆずりあい、ともに分け合うということを学んでいったと思うのです。これが一人っ子だと、長男など今ごろどうなっていたか、私どもも大きな失敗をしていたでしょう。しかし下からぞろぞろ、ましてよその子などもいるとなると、大変です。母親と一緒にいもを買いにいったりして、小さい弟妹のめんどうもみなければならない、そういうことが彼自身の活力や抑制心をやしなったのではないかと思います。

私は別に多産主義を主張するわけではありませんし、産児の問題にはいろいろむずかしい事柄が含まれています。しかし、割り切ったいい方をしますと、子どもは少ないと育てにくい。まして、「子どもは一人か二人にして、主人よりましな子に育てよう」などというような料見がよくない。人間をそんな粘土細工みたいに考えている根性がまちがっていると思います。人間は、そんな生やさしい生物じゃないはずです。こちらの計算ど

おりにはならない。思いどおりになったら、それこそ大変だし、第一面白くないですね。それこそ教育の仕事や保育学、児童学などは、一生をかけるにあたいしないことになりましょう。

・人間と動物

動物だってそう簡単に育てられないのではないでしょうか。まして人間は複雑で、天使にも近くまた動物以下にもなり得る。育て方と教育によるのです。まんぜんと人は万物の霊長だなんて人間が自分でいっているのは、おこがましいことだと思います。諸動物にまさる霊長になるかどうかは、人間が与えられた自由をどう活用するか、そのためにどう育成されるかにかかっていると思うのです。それが万物の霊長だと自らを誇り、世の生きとし生けるものを目先の目的のためにまっ殺したり、生きるものの生命のバランス（連関性）というものを無視したところに、近代人間の悲劇があると思います。その結果公害というものにせめられ自分で首をしめるようなことになっている。公害の原点は、私はそういうものだと思うのです。

もっと根本をいえば、現代文明の科学主義によっておこってきたのです。生きとし生けるものをそまつにあつかって、殺さなくてもいいものまでその生命をまっ殺してきてしまったところに起因しています。極端にいえばバクテリアだって、小さいプランクトンも存在の意味があるのです。野兎や、やもりや、とかげだって、生きている意味があるのです。

開発のおくれているという東南アジアへいってごらんなさい。やもりだってとかげだって人相（?）がいいですよね。野獣だって、自分の腹が満たされていて、おのれの生命をおかされないとわかれば、みだりに人をおそうということをしないものだといいます。大きな海亀だって、人が大ぜいで見まもっている中、砂浜で平気で卵を産んでいるといいます。

ところが人間というやつは、欲望無限で欲ばりですね。先にA、B、C君の例でいいましたように物欲や性の問題でもそうですね。動物は、種族保存のため自然のさだめたさかりの季節には、まことににぎやかなことになりますが、自然（神さま）が歯止めを与えてくれていますから、さかりの時がすぎると、聖人みたいに静かに無欲になりますね。犬でも猫、猿でもそうでしょう。ところが人間はどうですか。家庭裁判所で取りあつかう例だけみても、三角関係だとか四角関係だとか、妻だって負けてはいません。お互いに三角、四角関係を持ち、てんやわんやで後追いかけていって、硫酸ぶっかけたとか刺し殺したとか、家庭問題にとどまらずトンデモナイ犯罪をおかしてしまうこともある。あるいは、自分の女房に保険をかけ、自動車にも保険をかけて、女房と子どもを自動車に乗せ、自分だけさっと

おり、断崖へおとして殺したという事件もありましたね。また自分のボーイフレンドのやくざに亭主を殺すことを委託し、うまく思い通り殺させ、そのお通夜には喪服を着て、「わが愛する夫よ、悲しいことよ」といった表情でとりつくろっていた女もいると報道されていますね。人間はそういうおそろしい怪物性の一面も持っている。万物の霊長たる資格のある人間が、そうなるためには、そうなるように教育され、自己形成しなくてはならないのです。

おぎゃあと生まれた赤ちゃんのころから、幼児期をとおし、少なくとも三歳、四歳のころから、「ちょっと待ちなさい」「がまんしなさい」という素朴な形で欲望に歯止めをすることを学ばせられ、欲望に対処し、有効に活用することを学ばせられなければならないわけです。幼児教育、児童教育が熱心な今日、科学的ということが強調される今日、かえってその人間の素朴な人間性の原点、人間育成の源というのがはずれている。大変非科学的で非人間的なことが行なわれている。少なくとも私どもの臨床の場におけるケースを通じて、年々歳々そう思うことが多くなっています。

幼少時には、何といっても親の責任であり、親にかわる保育者の責任でもあります。やがて自己責任において自己形成をする。その基礎力を培うのも幼時からの人間教育であろうと思うのです。

人間とは、そんなものだということを幼児保育に当たる者が忘れてはいけないと思います。パスカルの定義によりますと、「人間とは弱いものだ、葦のようだ」そして「複雑怪奇な宇宙のクズのような、また怪物であると同時に尊厳で天使に近い、野獣から天使の間をいったりきたりしている生き物」という趣旨のことを言っています。実存哲学者らしい鋭い考え方だと思います。

三　幼児教育の明暗

そういう人間育成の出発点でもある幼児期は、非常に大事であり、子どもは人間的に正しく保育される権利をもっています。人間が人間らしく教育される権利です。その幼少時にどういう人に出会い、誰にどう育てられるか、そこに重大な問題があるのです。

それが、今日、教育過剰爆発時代といわれる社会の中で、無保護か、過保護または人間育成の基本をあやまる無慈悲なこと、おためごかしのあやまちが平然と行なわれているのは、何と残念なことだろうと思うのです。

・可能性をみつめる目

このごろの幼児教育の明暗ということを、もう少しつけ加えますと、五年前の「幼児の教育」(67巻　5号)誌に書きました「育ての心の再発見」ということです。そこでは、まず「雑草ともやし」という見出しで、今も変わらないA君のような例を引き合いにして書きました。第二の「子どもは生命である」という中でのべたことを改めて引用しますと、「小児科医の権威である遠城寺宗徳博士がよく言われることであるが、幼子の持つ生きる力を信じ、おおらかな謙遜な気持で子どもに接するのが、強い丈夫な子を育てる秘訣なのである。たとえば、母乳で育った子は、見かけは大きくなくとも生き生きとして、免疫その他の抵抗力が強く、暑さ寒さなどへの適応が人工栄養の子どもより強い。それなのに母乳栄養の子が年々減っているのは、

『幼い子の心の中に持っている力を信じない母親が多く、その他周囲のものの心がけが間違っていることによるのである。』

そして博士はこんなことも言っておられる。

『だいたい母乳は、生まれた時には、子どもが吸いついて吸えば与えられるという準備状態にあるもので、吸わなければ出ないのです。子どもが根気よく吸いついていく間に、二十日、一ヵ月たちますと、初めてたくさん出るようになるのです。したがって一週間以内に乳がたりないというのはあたりまえのことです。やっぱり、乳を出すという練習がなければ、といいますか実践をしなければだめなのである。ちょっと出が悪いからといっては、こんなことではやせてしまうからとか、時にはおばあさんの声援なども加わって、おおいそぎでミルクを買ってのませる。そうすると子どもは出にくいお母さんの乳を根気よく吸うよりも楽な、穴の大きいミルクの方に吸いついてしまうのです。出るべきもの、母乳がますます出にくくなる。それが母乳栄養減少の大きな原因になっていると思います。よく「親の心子知らず」と申しますが「子の心親知らず」ということもたくさんある。子をして言わせしむるならば、おそらく「お母さんたちあわてなさるな。もう少し私に吸わせてくれ。吸い出してみせる」というでしょう。こうした子どもの内にある母の乳房を吸って生存しよう、成長しようという生きる力を私たちは信じ、育てていくことが必要ではないかと思うのです』と。」

何よりも最も権威ある確かなあかしは、事実です。明暗の事例がたくさんあるのです。私どもはその切なる声を代弁しなければならないと思います。この領域は必ずしも私の専門ではないけれど、そこから出発した事実の因果関係が、私の専門の領域の方へなんとたくさんでてくることでしょう。

・人皆に美しき種子あり

子どもには開発されうる可能性が必ずある。どんな子にも美

しい種子があり、キラ星のようなものがあるのです。短期間にも大きく変わった例を先にもあげましたが、親でだめなら、幼稚園で、小学校で、更には中学校で、高校で、本人のもつ可能性をひき出し培い陶冶することが大切です。そしてだれとどう出会うかで、変わっていくのです。ところが、高校生の非行少年や問題児のことで高校の先生に、「もう少ししっかりやってくれなければ……」といいますと、「そういう基本的なことは中学でやることです」というのですね。中学の先生に言うと、「そういうことは、小学校で身につけるもので……」という。なるほど、今その少年のケースに必要なごく基本的なこと、そして私が求めていることは、人生の九九（算数にたとえれば）みたいな、ほんの基本のこと。そうなんです。ところが教育が責任を感じない。小学校の先生は、「やっぱり問題児は、親が……」と家庭に原因をおしつける。

だれでもそういいたいのでしょう。しかし、子どもというものは、仮に家庭が不十分でも、どこかの時点で、開発し教育すれば、朝に晩にかくもちがう、かくも変わるものだという事実がたくさんあるのです。教育とか人間育成とはそういうものだと思うのです。「はきだめにえんどう豆の花が咲く」これは人世の事実です。「泥池に蓮の花が育つ」とも昔からいわれてきています。私どもの信念は、彼らとの出会いの根本は、「人皆に美しき種子あり」なのです。必ず彼らの中にはキラ星のようにかがやく一点があるにちがいない。どこからか、萌えだす生命の力があるにちがいない。「明日は何が咲くか。やろうじゃないか」ということでなければならないと思うのです。

はきだめにえんど豆咲き
泥池から蓮の花が育つ
人皆に美しき種子あり
明日何が育つか。

～安積氏詩集「一人のため」より～

四　問題提起として

・教育の源流にかえろう

親や保育者が、人間をどうみるか、人間観、人生観は何か、自分の生き方をどう考えているか、ということを自らに問い、お互いに問いかわすということが、幼児教育、家庭教育のはじめだと私は思います。

中世と近世、あるいは封建社会と近代社会の子ども観のちがいをみてみますと、中世は、子どもを「望遠鏡を逆にして見るおとな」としてしか見なかったという。近代はそれとちがって「子どもを子どもとして見る。子どもを見るめがねで見る」ということであろうと思います。戦後わが国では、少しいき過ぎ

て子どもの世界を見る目を拡大しすぎて子ども中心になりすぎ、親の姿勢がくずれたという感もなきにしもあらずですが……。しかし子どもの世界をおとなの型やわくにはめないことが大事です。ペスタロッチやフレーベルが子どもの尊重を説き、ピアジェが子どもの世界を拡大し、フロイトに学んだニイルやホーマーレインが児童中心を唱えたことを、改めて正しく再認識してみるべきでありましょう。アーノルド・ゲゼルの人類の歴史になぞらえた人間の（幼時から青年期までの）発達史も大いに学び直してみるべきでしょう。

私が、あえてそういうことを前提としていろいろ注文し皆さんに申し上げるのは、今日、子どもの真のニードがゆがめられ、子どもの世界が奪われ、こわされているからです。一面には、子どもへの過保護、もやし化現象。子どもの欲望の方にひっぱりまわされて、真の子どもの人間としてのニードは害されている。人間教育がなされていないのではないかと感ずるのです。フラストレーション（欲求不満）ということだけおぼえて、トレランス（耐性）が忘れられている。「おあずけの味」がわすれられているのです。欲求不満を与えないということも大事でしょうが、時には待つ心、ガマンする心、おあずけがなくてはならないと思うのです。やすきにつくは人のならいで、欲望が満たされるくせがつくと限りがなくなるものです。そういう傾向の今日なのに、実は子どもの自然として、もっとのびのびさせ泥んこ遊びをしたり、ぴしゃぴしゃ水遊びをしたり、山をかけまわることなどの経験をさせない傾向が多すぎる。きたない、あぶないと禁止している。のびのび体験させ与えるべきものを抑圧し、おあずけすべきものを与えすぎる。逆だと思うのです。ちっとも科学的ではありませんね。子どもを子どもと見、子どもの世界を拡大尊重したこの道の先覚者たちの子ども観は、そんなことのためではなかったはずです。まこと子どもの真実に沿った人間育成のため、真のニードに沿うような人間教育のためのものだと思うのです。

そこで、今日の話の第一の結論は、幼児教育のまことの原点に帰れということです。倉橋惣三先生の理論（いろいろ批判はありましょうが、わが国の近代的幼児教育の出発点）に帰ろうということです。

ペスタロッチ、フレーベル、ニイル、ホーマーレイン、ピアジェあるいはゲゼルなどの先覚者たちは、子どもを本当によく見つめ、愛していたと思います。その愛こそが大切です。そこから生み出された学説が、その後の人々によって、科学の名のもとに誤解されていはしないかと思います。たしかにそうだという気がいたします。

同じような意味で、わが国の幼児教育、家庭教育の先覚者で

あった倉橋惣三先生も、正しく理解されていないように思われるのです。もう一度倉橋精神、その心を再発見して現代に生かすことが要請されていると思うのです。

・真実の人間の声を聞こう

第二のことは、人間のいちばん限界状況とみられる、いちばん底辺におかれている人、いちばんむなしいとみえるところにある人々にライトをあてて、そこにこそ真実の人間の声がある。その声、その訴えに耳を傾けよう。そこから人間の希望を、可能性というものを見てみよう、その必要があるということです。

私の専門の世界でいえば、重度精薄者、非行少年、更には死刑囚、癲患者、テプレシブ（鬱病の人）等々です。おもえば、私もその人たちと同じ人間としてここにいるのではないか、という思いでいっぱいなのです。かえって、こっち、の方が業がふかいのではないか。そういう自覚から出発したい。このごろの世の中では、人のいたみをいたみと感じない人が多いですね。名付けて「イタクナイイタクナイ病」という。他人がどうであろうと、わが身、わが家庭に痛みが及ばなければ、痛みを感じないということです。ところが、死刑囚、非行少年、あるいは人から忘れられ、すてられ、顧みられない人々が、自分の痛みの体験を通じて人の痛みを感じているのです。他の痛みがわかるのです。お偉い人々よりはるかに人間的だと思うのです。

「人の痛みを痛みと感ずる」「よろこびをよろこびとする」というのが、本当の人間性の原点ではないでしょうか。そういうことが、かえってどん底の中にいる人たちにあるということを、しみじみ感じいっているわけです。

島秋人という死刑囚（以前「幼児の教育」にも書き、このたびの「人間の復興」の中にも書きましたが）がおりました。幼時から不幸な、人にうとまれる生活のあげく、やみからやみの生涯を送った、死刑囚です。その人が中学時代、一度ほめてくれた絵の先生を思い出して、その先生に手紙を出したというのが、彼の新しい生命への転機となりました。光から光への転換でした。その彼が、三十三歳にしてこの世の生を断頭台に終わる時に言ったことばは、次の祈りでした。

「精薄と呼ばれて人がうとまれることのない世の中のきたりますように。貧しきがゆえに人がうとまれることのない、そういう人にこそ真の教育が与えられますように。死刑が廃止されても犯罪なき平和な世の中がうちたてられますように。私にもましてつらき立場の人々の上にこそ、神の恵みがありますように。……」

私は、島秋人のこと、彼の歌と祈りに少しでもこたえることのできる「鎮魂」の生涯をこれからいたしたい。そう決心したのです。少年保護とか人間教育を考える時の原点としたいと思

い立ったのでございます。

また、私はゴーリキーの「どん底」の中のセリフがとても好きなのです。

あの作品は、人生に対するスラブ民族のそこぬけの楽天性とふかい哲学性を、暗いどん底の中で見せています。その戯曲の第四幕にサーチンという人物が登場します。大変ユーモアのあるどん底の生活をしている労働者、そのサーチンという人物に言わせているゴーリキーの人間観ですね。

「いっさいは人間の中にある。いっさいは人間のためにある。こいつあすばらしいや。だから人間を尊重しなくちゃいけねえ。あわれんじゃあいけねえ。憐憫をもって考えちゃいけねえ。大事なことは、もっとお互いにいい人間になることだ。お互いに生きているということなんだ。この人間のために乾杯」というセリフです。

人間は尊重しなければいけない。あわれんではいけない。「おかわいそうに」なんていうのはいけない。人間は尊重さるべき存在だという。すばらしい思想だと思います。

とりわけ今日の日本の教育や児童観に対しては頂門の一針というべきでしょう。「それころぶ、それあやうし」という過保護も、「おかわいそうに」などという浅い憐憫の情も、もっと深く考え直してみなくてはならないのです。あわれまれたり、おためごかしされるような存在では人間はないのです。尊重され、敬愛されるべきものだということ。それが人間教育のかえるべき、あるいは出発とすべきところだと思うのです。

あのすばらしい目をした、あの輝やかしい、ふれればこぼれるような、幼児の前に、われわれは静かに立って、子どもの心とリズムを通わせたいものです。ゴーリキーの「人間」というところに「幼な子」という言葉をあてはめて、幼な子のために乾杯したいと思います。

五　この小さきものへの賭け～結びとして～

最後に、私の過去を総括し、前へ進む道程の一里塚とも思って世に問うたと申しました「人間の復興」の終りの方の部分を引用させていただきます。

「現代のような情勢下でも、子どもと若者と大自然との火花の散る出会いとハーモニーの中に、人間の未来の座標を確認する一つのよすがを見つけることが可能ではないかと思うのです。回復された自然と若もののエネルギーさえあるならば、未来は必ずしも暗いばかりではない。日本の将来にそれほど絶望しなくてもよいのかもしれない。そんな風にも思えるのです。幼児や若者のエネルギーに正当な座を与え活路を用意する。希望のある生き甲斐を実感できる場を備える。そのことがさし当たっ

て一番大切な明日の社会への起点となるのではないかと思うのです。教育の父ペスタロッチの名は、スイスでは日本と大変ちがった響をもっていると言われます。「あいつはペスタロッチだ」ということは、「あいつは少々ぬけている、馬鹿げたことを、こりもせずやり続けている」というような意味に使われるそうです。これは大変面白いと私は思いました。計画も下手だし、事業もあまり成功しない。ただ子どもが好きで、社会問題や人間の未来のことも、一切をあげてすべて目の前の子どもたちに賭けている。彼の生涯が、馬鹿げて見えるくらいだったのでしょう。思うに、近代の人々にはあまり利巧になり過ぎ、結局あまり聡明でないみたいです。これからは、人は少し馬鹿になり、あいつはペスタロッチだといわれるようになって、子どもや若ものに賭けていいのではないか、それが大切なことではないかと思います。私も、つとめてそういう抜けたものになりたい、そういう愚かな賭けをし続けていきたいと念願いたすのであります。」

先人にならって、この賭けを勇気と希望をもってやりつづけてまいりましょう。

福音書の中にこういう言葉がありますね。

『このいと小さきものの一人に為したるは、即ちわれになしたるなり』。私は、この聖句を馬鹿正直に信じてまいりたいと願っている者であります。

恥さらしのような自分の幼少時や、親馬鹿のような告白から始めた今日のこの講演も、実はこの最後の言葉を申しあげるためのものだったという感がいたします。皆さまがもし共鳴してくださって、一緒に味わい、「人間を育てる」仕事の力の泉としていただければ幸いであります。

（東京家裁判事　お茶の水女子大学講師）

―一九七一・六月・現職研究会・講演―